千の風になって

芥川賞作家、新井満氏の訳詩による「千の風になって」が一昨年（平成１５年)、朝日新聞の天声人語で紹介され、大きな反響を呼びました。

　千の風になって　　新井満訳詩

私のお墓の前で 泣かないで下さい
そこに私はいません 眠ってなんかいません
千の風に　千の風になって
あの大きな空を　吹きわたっています

秋には光になって　畑にふりそそぐ
冬はダイヤになって　きらめく雪になる
朝は鳥になって　あなたを目覚めさせる
夜は星になって　あなたを見守る

私のお墓の前で 泣かないで下さい
そこに私はいません 死んでなんかいません
千の風に　千の風になって
あの大きな空を　吹きわたっています

千の風に　千の風になって
あの大きな空を　吹きわたっています

原詩は、わずか十二行からなる作者不詳の英語詩ですが、欧米では、一部の人たちの間で、かなり以前から知られていたそうです。

英国では１９９５年、アイルランド共和軍（ＩＲＡ）のテロで亡くなった二十四歳のイギリス軍兵士が「僕が死んだ時に開封して下さい」と両親に託していた封筒に、その詩が残されていました。
この模様がＢＢＣで放送されると、たちまちイギリス全土から「朗読された詩のコピーが欲しい」という問い合わせが殺到したそうです。
また、２００２年、ニューヨーク同時多発テロ事件の一周年追悼集会で、犠牲になった父親を偲んで十一歳の少女がこの詩を朗読しました。
米紙によると、１９７７年、映画監督のハワード・ホークス氏の葬儀で、俳優のジョンウェインがこの詩を朗読。さらに、１９８７年にはマリリンモンローの二十五回忌の追悼式でこの詩が朗読されたと言われています。

新井満氏がこの詩を翻訳されたのには、次のような経緯がありました。

彼の親しい友人、川上耕さんの妻、桂子さんが、ガンのため四十八歳の若さで亡くなったのです。
後に残された川上さんと三人の子供さんの悲しみは余りにも深く、新井さんは慰めの言葉をかける以外、なすすべもなく、ただうなだれるばかりでした。

幼友達の悲しみに、何一つ力になれない自分の不明を深く恥じ入りながら、一年が過ぎた頃、桂子さんの親しい仲間達による追悼文集が出されました。

その文集に「千の風」の翻訳詩が紹介されていたのです。
その詩に出遭った新井さんは心が震えたそうです。
作曲家であり、歌手でもある新井さんは、「よし、これを歌にしてみよう。そうすれば川上君や子供たちの心をほんの少しくらい癒すことが出来るのではなかろうか・・」と考え、何ヶ月もかけて原詩となる英語詩を探し出し、日本語詩訳を作り、曲をつけ、自ら歌いＣＤを製作したのです。
ＣＤは桂子さんを偲ぶ会で披露されました。参列者は一様に大粒の涙を流しながらこの歌を歌ってくれたと言います。

この詩は、先立って逝く人が、後に残された人々に向かって、「いのち」の本当のあり方ーいのちは死によって消滅するのではなく、再び宇宙に自在に遍在するーを教え、「だからあなたもそんなに悲しまないで下さい。どうか生かされている命を精一杯輝かせて生きて下さい」と、優しく力強く語りかけるというものです。
慈愛に溢れるその言葉は、悲しみに沈む人々の心を優しく包み込みます。そして、生きる勇気を与えてくれます。
それはまた、阿弥陀さまの「大悲」と呼ばれるお心にも相通じるものがあります。

浄土真宗の僧侶である西脇顕真氏（愛知県・普元寺副住職）は、そんな阿弥陀さまの「大悲」のお心をこの詩に重ね、次のような素晴らしい詩にされました。

「千の風」

わたしのお墓の前で泣かないでください
そこにわたしはいません
永遠の眠りになんてついていません

ほら　もう千の風になって
世界をかけめぐっています
雪にきらめくダイヤモンド
穀物にふりそそぐ陽の光
優しい秋の雨の中にいます

毎朝起きて窓を開ければ
そよ風がふわっと入ってきて
あなたの周りをくるくるまわる
夜には星がそっと光っています
あなたは大きないのちに
つつまれているのです

わたしに会いたくなったとき
ナモアミダブツと呼んでください
わたしはいつでもあなたのそばにいます
だからもうお墓の前で泣かないでください
わたしは死んではいません
永遠の眠りになんてついてはいません
いつでもあなたのそばにいます

西脇さんは、この詩に寄せて、
「親鸞聖人は『弥陀如来は如より来生して、報・応・化、種々の身を現じたまふなり』とおっしゃっておられます。
阿弥陀さまは生きとし生けるものを救うために千変万化しながらありとあらゆる姿をとって下さるというのです。
そしていかなる人も阿弥陀さまと同じ広大無辺な大悲の活動をする仏さまにして下さるのだと教えて下さいました。
先立った大切なあの人は、今は大悲の風となり、智慧の光となり、そしてナモアミダブツの声となって私を、あなたを呼び続けていらっしゃいます。『泣きたいだけ泣きなさい。いつでもあなたのそばにいます・・・』と。」
と語っています。

お釈迦さまは、私たち人間がこの世に生まれた限り、避けて通れない苦しみが八つあると説かれましたが、その中でも、愛別離苦ー愛する人と別れる苦しみーは、殊の外深い悲しみを誘います。
失った人が大切な人であればあるほど、残された方の心に受ける心の傷みは、中々癒すことはできません。
もし、その心の傷を癒すことが出来るとするならば、それはその痛みを本当に我が痛みとする仏さましかいらっしゃらないのです。
そして、そのお心（大悲の心）と同じ心を持っている方こそ、すでに先立って仏さまになられたあの方なのです。
ですから、この詩で語られる言葉は、そのまま仏さまの声なのです。恩愛の情を超えた真実の声なのです。

今、深い悲しみの中にいらっしゃるあなたの心に、この真実の声が届いたならば、きっと、「あの時の、あの悲しい出来事は、私の人生を深く見つめるための、かけがえのないご縁だったんだなー」と、思える日がやってくると思います。

生まれ難い人間世界に生まれさせて頂き、一度きりの人生を歩む私たちです。いかなる苦難をも喜びに転じていく、そんな尊い、たくましい人生を歩みたいものです。
それが先立って逝った人の「願い」でもあるのですから。

平成１７年２月　　「光明寺だより３８号」より